

- 肺痺寒熱」酔て内を使ふに得たり、素問五藏生成論。
- 肺中風」口燥て喘し身運て重く冒して腫脹す。
- 肺風」(金匱)第十一) 千金曰仰臥して胸滿ち短氣、冒悶し汗出づ。
- 半精半血」男子未だ精、充滿せずして色慾過度すれば半精半血を出す是れ力を竭して肝を傷る故也。(醫通二65)
- 肺炎類」集成二20 24 同三27、特解二18、同四3) 和漢醫方。
- 梅核氣」七情の氣が痰氣を結成して梅核の如く或は破絮の如く咽喉の間に在て出でず下らず婦女に多し。(回春五52詳)
- 破爪」は二八の少女を云ふ。(大和本草八3)
- 反花惡瘡」本草十五68曰肉有り飯粒の如く之を破れば出血す、生ずるに隨て反出す」巢源三十五に詳。
- 反佐」此れ藥を用るに其病に同じて逆はさるを謂ふ。(類十二8素問至真要大論)

又本草十七上48の如き其例なり。

- 發」凡そ之を發と云ふ者は權宜の法藥を用ひて以て後症を觀る辭也。(特解一11)
- 八風」靈樞九宮八風篇を見る可し、類經廿七43詳なり。
- 白魚は衣魚也。○白薑は乾薑也。○白丁香は雄雀の糞也。
- 反胃」翻胃、番胃皆同し今の胃癌也千金十五16又前の【エ】噎膈下を見よ食入て還て出づ諸方書皆載す。
- 白飲は白湯即ちサユ也(譯通)
- 破咽は臥久く骨露はれ筋肉敗る也。(類六32)
- 敗疵」脇に發する女子の病也藥方灸方あり類十八30靈樞癰疽篇。
- 肺痺」是れ素問玉機真藏論に「風は百病の長也云々治せざれば病入て肺に舍る名て肺痺と曰ふ咳を發して上氣す。
- 梅毒」傳染の者は軽く自發の者は重し淫猥の人病む濕熱の病也。數種あれども

治方は一也。和漢醫方

【七】

○鼻痔「ハナタケ」也治方續本事方五七其他諸書。

○鼻塞「又鼻窒」「ハナフサガリ」是れ腸胃の濕熱息肉を生ずる也或は臓中に蟲有り。

○鼻扇「醫通十二86曰是れ肺將に絶へんとする也若し喘滿痰鳴を兼る者は必ず不治也。

○閎「は秘也大便澁滯等。○痞」は否也つかへ通泰せざる也。

○飄驟「飄は早風也驟は早雨也即ち急風雨。

○肥瘦を知る法「は脰肉の堅否及び皮の緩滿を視る其他種々の診法甲乙經六11以下。

○標本「標は末也本は根也、病に本末有り經絡にも本末有り本草一下14、素問至

眞要大論、同標本病傳論。

○痺「は閉也。(十類34)又病の陰に在るを痺と云ひ陽に在るを風と云ふ。(類廿一)又五痺有り又喉痺あり【コ】下を見よ皆血氣閉て不通より起る。

○痺厥「是れ二病也痺と厥は別也。(類八26)

○脾瘕「口に甘を病む是れ美食の發する所也。(類十六46)又事親曰瘕は熱也。

○眉鍊癰瘡「是れ眉中に生ず。(本草四十三13)事親十一30には之を單に小兒面上の瘡と云へり藥を用ひず刺血せり。

○七情「は喜、怒、哀、樂、懼、惡、欲也、一に好、惡、愛に作る」又類十五8別に詳細の論あり。

○七氣「は寒氣、熱氣、怒氣、恚氣、憂氣、愁氣也「巢源」恚は字典恨怒也又恨

○病機「素問至眞要大論類經十三卷、其結論に曰故に大要に曰謹て病機を守て各

【七】

其屬を司る、有る者は之を求め、無き者は之を求め、盛なる者は之を責め、虚する者は之を責む、必ず五勝を先にし其血氣を疎し、其を調達して和平を致すと註曰上文十九條は即ち病機也。機は要也變也病變の由て出る所也、凡そ有無皆之を機と謂ふ、有は其實を言ひ、無は其虚を言ふ云々」又原病式を見よ。

○臂厥ひせつ」靈樞經脈篇、類十四一曰缺盆中痛甚ければ兩手を交て替す此を臂厥と爲す是れ肺の所生病を主る云々、替は昏悶也。

○百合病」金匱曰百合病は百脈一宗、悉く其病を致す也意、食んと欲するも食ふ能はず、常に默然として臥するを得ず、行んと欲て行く能はず、飲食或は美なる時有り或は用ひざる有り、食臭を聞く時、寒の如くして寒無く、熱の如くして熱無し、口苦く小便赤諸藥治する能はず、藥を得れば則ち劇はげしく吐利す、神靈有るが如き者、身形和の如く其脈微數、每溺時に頭痛する者は六十日に乃ち愈ゆ云々就て見る可し、又赤水廿四29。

○病後の諸症」傷寒愈後の發腫は水氣也其治云々。○愈後の遺毒、傷寒汗下不徹餘邪、耳後に結ぶ其治云々。○愈後碗頭瘡を發す、是れ汗下後餘毒の不盡に因る其治云々。○愈後勞復の治云々。○愈後女勞復（鴻曰勞復は傷寒等の愈後早く勞働して元の病に落ち返る病。○女勞復は愈後早く交合して元の病に落ち返る皆大病と成る）。○愈後陰陽易、是れ早く愈後の男女と交合して無病の相手の男女に病を起す者也其治云々。○愈後の虚弱其治云々。○愈後の昏沉其治云々。○愈後飲酒復劇其治云々。（赤水廿四30）

○皮寒熱」する者は席に附く可からず毛髮焦れ鼻槁腊せきす其治云々。（靈樞寒熱病篇）腊は乾也字典。

○百日咳」俗稱馬脾風又風喉と云ふ小兒痰嗽は心火が肺金を尅制し或は寒邪停留して肺愈寒へ、化して熱と爲り、痰喘、咳逆上氣し肺脹を生ず速治せざれば危し。（慈航七の二53）

- 病邪の人に中る陰陽異有り」靈樞邪氣藏府病形篇。
- 人の性質」靈樞陰陽二十五人篇、同行鍼篇、同通天篇。
- 糜を出す」溘穢、泥の如し。(類十三¹⁴) 溘穢は軟大便也。
- 繆刺」繆は異也左の病には右を刺し、右の病には左を刺す、刺其處を異する也、奇邪の絡に在るを治す。(類廿⁴⁷、素問繆刺論)
- 必然」七十九難の本義曰必然として得ること有るが如し古人記入曰必然是満足の貌」字典曰滿也又威儀有る也。
- 泌」音秘泉水の貌、是れ靈樞邪客篇に其津液を泌して之を脈に注ぐの解也。
- 七害、五傷、三瘡」是れ【フ】婦人三十六疾下に記す。
- 秘結」大小便不通也(千金廿)又秘結に大便溘闕有り、原病式19曰闕は俗に秘に作る、或は大便秘溘にして闕す者有り、燥熱が腸胃外に在て、濕熱が内に在る故也其理下痢後重に同し。

- 皮膚諸瘡」巢源第三十五卷以下。
- 飛尸」是れ五尸中の一也巢源四十二卷。
- 人の身は天地に應ず靈樞邪客篇等其一也故に天地の道に通ぜざる可からず。
- 病氣の始終及淺深」軒岐救正論の首卷28曰始を弱と云ひ次を虚と云ひ衰と云ひ損と云ひ怯と云ふ、又藏は府より深く、府は經より深く、經は絡より深し、其初起は絡より經に入り、府に入り藏に入れば則ち生機已に絶す云々」鴻曰古書曰初病を虚怯と云ひ其次は虚損、虚勞、勞瘵と云ふ順序なり、勞瘵は勞の極を云ふ所謂五勞六極七傷也。
- 七傳、間藏」五十三難に曰七傳は死し間藏は生くと何の謂ぞ、荅曰七傳は其勝つ所に傳ふる也假令ば心病て肺に傳へ、肺肝に傳へ、肝脾に傳へ、脾腎に傳へ、腎心に傳ふ、一藏再び傷れず故に七傳の者は死す(心より始て次を以て相傳へ肺の再に至る是れ七傳也、故に七傳して死する者は一藏再傷を受けず)假令ば

心病て脾に傳へ、脾、肺に傳へ、肺、腎に傳へ、腎、肝に傳へ、肝心に傳ふ是れ子母相傳へ竟りて復た始る、環の端無きが如し故に生と曰ふ也」鴻曰此れ五行の尅と生との結果也。

○病の眞假「寒病が熱に似たるあり、熱病が寒に似たるあり、陽病が陰に似、陰病が陽に似たるあり、其眞假を明にするを要す」素問至眞要大論に曰寒は之を熱し、熱は之を寒す（此れ寒を以て熱を治し、熱を以て寒を治する對症療法也之を正治と云ふ）微なる者は之に逆ひ甚き者は之に従ふ（之に逆ふとは上文の正治を云ふ此の正治は病が微弱なるときに限る若し其病が甚しきに正治の法を用ひて之を攻撃すれば大害を生ず、兵法に堂堂の陣は撃つこと勿れとあり、鍼術に熇熇の熱は刺すこと勿れとあるが如し、又前【ツ】下、通因通用の處に説きしが如く病に従ふて之を治す可き也而て其病の甚き者に眞假あり）類註曰其病微なる者は逆ふ可し此れ上文の正治也、病の甚き者は熱極て反て寒し、寒極

病の眞假は治方相反す瘵にせざれば人を殺す又た正治則ち對症療法は輕症に用ゆ可く重症は從治す

此の論は漢方重大原則也眞理に通ぜざる可からず

て反て熱するが如き假症あつて辨し難く、其病則ち甚し故に従治す可し、從治は即ち下文の反治也、王太僕が曰病の微小なる者は猶ほ人火の如し水を以て滅す可し故に其性に逆ふて之を折き之を攻む、病の太甚なる者は猶ほ龍火の如し水に遇ふて燔く（鴻曰龍火は雷火也）其性を知らずして水を用れば反て光熾天に至る云々）帝曰何をか逆從と謂ふ岐伯曰逆は正治也、從は反治す（類註曰治に逆從有るは症に眞假有るを以て也云々以下眞假を論ずること頗る詳悉也閱讀す可し長文の故に略す。

○慄悍「慄は急也悍は猛利也類十二22。

○病は其本を治む可し「素問二卷1黄帝曰陰陽なる者は天地の道也萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也病を治る必本に求む。

○脾風「素問玉機眞藏論曰風は百病の長也云々肝之を脾に傳ふ名て脾風と曰ふ瘴を發し腹中熱し煩心し黄を出す云々」瘴は熱邪也。

是れ大原則也記憶す可し

- 病能^{たい}「凡そ病を致す害、皆之を能と云ふ（類十五）蓋し能は態也。」
- 痞^ひ「仲景曰滿て痛まざるを痞と爲す、滿て痛むを結胸と爲す。」
- 飛羅麩は小麥粉を細なる篩^{ふるい}にて「フルヒ」たる也。（和草）
- 七方十劑「藥方に七有り、藥劑に十有る也本草一卷又事親一卷を見る可し。」
- 療疽^{ひょうそ}「とは肉中に忽ち點子を生じ豆の如く粟の如く梅李の如く臍に入れば人を殺す其治千金方二十二卷第六に詳也代指の類症也又和漢醫方。」

【七】

- 臍^{さい}「臍は滿也鬱は奔迫也。（原病式2）」
- 附腫「肉が泥の如く按^おども起らず。（類註）」
- 慮癭^{りょ}「癭は伏と同じ小腸熱を大腸に移す（原病式）。又事親八4曰結硬塊の如く面黃み不月す云々。」
- 浮腫「寒勝てば浮腫す腹滿浮腫は寒病也。（類廿六58）」

○風癩「は熱甚に由て風燥の化を兼ね涎、胸膈に溢^{あふ}れ燥^{かわ}燥^{きやく}して癩^{ひく}癩^{こと}、昏^{くら}昏^し、僵^た僵^るす（原病式）此れ小兒癩也。」

○風逆「手足腫れ時に寒す饑れば煩し飽けば善く變ず。（靈樞經狂篇類廿二16）」

○風痺「靈樞壽夭剛柔篇曰病、陽に在るを風と曰ひ病、陰に在るを痺と曰ふ陰陽俱に病むを風痺と曰ふ其治云々又風痺は中風の一也【チ】下參照。」

○風消「隔消、肺消は皆消渴病の中也（事親三24）又素問陰陽別論曰二陽の病、心脾に發すれば隱曲するを得ず女子は不月す、其傳、風消を爲す其傳、息賁を爲す者は死す類註曰肌體風消し氣息奔急す。」

○風痲^{はい}「身に痛なくして四肢收らず智亂れず。（巢源一2又千金方八第五）」

○風懿^い「奄^{たち}忽^{まち}として人を知らず舌強て言ふ能はず。（巢源一2）」

○風瘡「素素問生氣通天論曰穴僉以て閉ち發して風瘡を爲す類註曰病む所風に在るを以て風瘡と云ふ。」

【七】

【フ】 風濕」治千金方七十八」鴻曰此れ五痺中の一なる著痺と信ず。

○風厥」素問評熱論曰汗出て身熱する者は風也汗出て煩滿する者は厥也名て風厥と曰ふ。(類十五二十) 赤水曰小兒手足搐搦し厥を發す。

○風水」素問評熱病論曰氣少く、時に熱し胸背より上て頭に至り汗出て手熱し口乾て苦だ渴し、小便黄み目下腫れ腹中鳴り身重く行き難く月事來らず、煩して食ふ能はず正、偃する能はず、正偃すれば則ち欸す風水と名く」偃は臥也又素問大奇論曰腎と肝と并て沉脈を石水と爲す并せて浮を風水と爲す。(類六十九) 又赤水六四、素問水熱穴論等詳義。

○風癩癩疹」千金方二十二卷第五、又諸方書に在り。癩疹の解は【イ】にあり風癩は「カユキ」也。

○風疹」風邪肌中に客し疹起て蚊の食ふが如し癩疹は皮中に在り此れは皮表に出づ。

○風毒」風毒は千金方七卷に載す即ち脚氣也行て見る可し」又一種風毒出なる者あり本草十五六七曰若し身體粟を作し或は麻豆の如きを出すを風毒出と爲す針を以て刺して黄汁を出して止む。

○風勞」二神傳曰風邪より熱往來して勞病と成る。素問曰目暗く唾出ること涕の如し風を惡て振寒す類註曰勞に因て風に傷れ氣喘す又事親六卷八に記する所あり。

○風驚邪」は體虚し風邪、心の經を傷るに因り乍ら驚き乍ら喜ひ恍惚として常を失ふ。(巢源二)

○風搐」肝病にて「ヒク」を云ふ。(事親六一)

○風虚」は産後血氣勞傷藏府虚弱し風冷を受く云々(良方廿一七) 又千金方十四第六又巢源曰人の腠理開て風邪を受れば所感に隨て衆病生ず勞傷の人血氣を傷りて致す所也。

○風病種々【シ】諸風下。

○風牙痛「風熱に因る。(阿是要穴)」

○腹中狹窄「肥人自ら腹中狹窄を覺へば是れ濕痰が藏府に流れて升降せず其治云々瘦人が自ら胸中狹窄を覺へば是れ熱氣が藏府を薰蒸す其治云々。(慈航三の二53)」

【イ】下胃擴張參考。

○附骨疽「環跳の穴が痛て止まざれば之を生ず其治云々。(慈航八の一9)」

○附骨癰「諸瘡大痛肉色を辨せず漫腫光色を附骨癰と名く。(同上)」

○伏梁「凡そ積の内伏し堅強なる者を伏梁と云ふ心積のみに非らず又曰伏梁の一症即ち痞塊は灸最も妙。(圖翼十一11)」

○附「は「ウツハレ」即ち浮腫。(類十五22)」

○不仁「是れ古の麻痺也(慈航四の二64、又赤水十六34同し又慈航曰不仁は痛痒を知らざる也)又曰衣を隔て搔が如し。

○風水膚脹「は目窠上微腫して新臥より起る狀の如し。(類五50)」

○膚脹「は寒が皮膚に客して堅く腹大身腫按せば陷て起らず色變せず。(赤水六35)」

○伏連「は勞瘵の五藏内に傳る者を云ふ。(赤水十二15)」

○不禁「は日夜遺尿等の「シマリ」無き也。(赤水十九15)」

○俛「は俯と同じ(類經)即ち俛仰は俯仰と同じ。

○釜底薪を抽く法」とは例へば下劑を用て腹中の熱を去るの術語也。(赤水十一醫案27)」

○婦人諸病「千金方二卷已下、事親十一22以下和漢醫方。

○婦人三十六疾「千金方四卷19赤白帶下崩中漏下に曰諸方三十六疾を説く者は、十二癥、九痛、七害、五傷、三瘕不通是れ也、「十二癥」は下す所の初め膏の

如く、二に黒血の如く三に紫汁の如く、四に赤肉の如く五に膿痂の如く六に豆汁の如く七に葵羹の如く八に凝血の如く九に清血の如く血水に似たり十に米泔の如く十一に月浣の如く乍ら前み乍ら退く十二に經度期に應ぜず、「九痛」は

一に陰中痛傷二に陰中淋瀝痛三に小便即痛四に寒冷痛五に經來れば即ち腹中痛六に氣滿痛七に汁出陰中蟲の嚙む如く痛む八に脇下分痛九に腰膝痛。「七害」は一に窮孔痛て不利二に寒熱に中て痛む三に小腹急堅痛四に藏不仁五に子門不正背を引て痛む六に月浣乍ら多く乍ら少く七に害吐。「五傷」は一に兩脇支滿痛二に心痛脇を引く三に氣結不通四に邪思洩利五に前後痼寒。「三痼」は一に羸瘦肌膚を生ぜず二に産乳絶三に經水閉塞、病異同有り之を治するに白聖圓三〇六疾を治す。

○跌蹶病其人但だ能く前み却くこと能はず臑を刺す二寸此れ太陽經傷也。(金匱第十九)

○婦人傷寒雜病」活人書十九卷。

○婦人妊娠」金匱第二十」和漢醫方。

○婦人風痺」千金方三卷11。

○不眠」靈樞大惑論篇、和漢醫方。

○複方單方」是れ藥の調合法素問至眞要大論、本草一卷。

○風土病」其地に慣れずして病む。(巢源廿一卷)救民妙藥集。

○怫」は鬱怒也。(類廿一4)

○沸」は麻沸あり星沸あり糜沸あり雲沸あり蟹目沸あり是れ湯沸の度の名也。(巢

成四38)

○咬咀」古は藥を口齒にて「カミ」切りし故に此の名あり今は刻み用ゆ。

○不内外病」は飲食、勞倦、跌撲也。(回春一7)

○分肉の間」大肉の深き處各分理有るを云ふ。(類十九16)

○伏鼓」は脈の搏つ、堅強を謂ふ。(類五42)

○風冷」は血氣不足風冷を受けて面青く心悶嘔逆四肢厥冷等を爲す。(巢源)

○風熱」は風熱を受け惡風寒戰、目脱せんとし涕唾出で精明ならず。(同上)

○撫「芎は江南の川芎也。」

○稗「は「スリヌカ」也。(三才圖會) ○不托は餽餽也「ウドン」なる可し。(大和本草)

【ヘ】

○饑餒【チ】下に載す。○屏翳「は兩陰の間也一名會陰。」

○偏枯「は一名偏風半身不遂也靈樞九卷熱病篇曰偏枯は身の偏用られずして痛み、言變せず志亂れず病分腠の間に在り。」

○辟「足行く能はず。(類十四40) ○僻僻相同し。(類註)

○併辟「併は拘攣也辟は偏欹也。(類廿四31) ○蹠「は足行く能はず「エザリ」也。」

○瞥「は財に見る也一寸目を過る也。(字典) ○炳「は艾炷也(類十八29) 字典燒也。○平人「は無病の人と謂ふ。(靈樞終始篇)」

○閉「は閉也。(類廿二23) ○府「は聚也府庫の謂。(類六10)」

○併病と合病「續論下12已下其他傷寒論類を見よ。」

○便不通「瘟疫論四、續論下92、活人書十一12、十八12、格致餘論14、事親十一20等其他和漢醫方。」

○平旦「とは寅卯の間也(類十四52) 又類五卷1素問脈要精微論曰診法は平旦を以てす其類註曰平旦は陰陽の交也。」

○附髓病「は脘痠痛甚しく之を按せば不可なるを云ふ。(類十六20素問刺瘡論)」

○閉癰「類七31解無し、小便不通也。」

○并「偏聚也。(類十四33) あつまる也。」

○偏正頭痛「回春曰左に偏する頭痛は風と血虛也、右に偏する頭痛は痰と氣虛也左右俱に痛むは氣血兩虛也。」

○便毒「は少腹縫合の間に生ず其毒、初めは寒熱起り腿の間腫起し疼痛す又下疳久しく愈ずして成る。」

○仆擊病とは暴に撃つ如く仆る也。(素問通評虛實論)

【ニ】 第二章 疾病五十韻索引

【ホ】

- 暴トワカは多く暴卒也暴暗、暴死の類也、原病式曰諸暴強直は風に屬す又曰暴瘡、暴注、暴病は皆火に屬す。
- 暴厥脈來ること喘の如きを云ふ人と言ふことを知らず（次註曰喘は卒に來る盛に去て衰ふ）素問大奇論。
- 暴痛は卒に痛む也。○賁響ほんきやうは腸胃の雷鳴。（類十四4）
- 冒味は昏暗也、胃は蔽おほふ所有るが如し又曰目見へず。
- 冒心胃は覆ふ也心昏を云ふ。（集成二44）
- 昏こは悶也又曰昏悶又目の不明又曰神昏氣濁。（類廿四29）
- 鴛塘ぼくとふ是れ鴨糞あひるのふんの如き人糞を云ふ。（類廿四28）
- 膀胱病素問標本病傳論曰膀胱病は小便閉づ五日に少腹脹れ腰脊痛み脰すび痿しなくす巢源十五卷7曰病熱し胞瀼しより小便通ぜず小腹偏に腫痛す是を膀胱の實と爲す、

- 崩中赤水に曰崩は血暴にわかに下ること山の崩るが如し慈航曰是れ七情の過度に因て火を動す也。
- 募俞募は鍼灸の陰穴也俞は陽穴也【ユ】を見よ。
- 募筋地に林木有り人に募筋有り註に曰募は筋脈の聚畜する處也（類三49、圖翼六同九8）靈樞邪客篇。
- 奔馬牙疳是れ疳蟲が口齒を侵食し腮頰あやほらを穿破する急症也。（慈航五の二72等）
- 瘡然ほうぜんとは浮慘の貌面浮腫す。（類十五16）
- 老牛兒は山野に生ずる「ゲンノシヤウコ」と云ふ藥草也。
- 補寫不足を補ひ有餘を瀉し中和を得せしむる也、天地の道は補瀉して中道を

得る一事のみ、外に學道は絶對無し、靈樞九鍼十二原篇、素問至真要大論、六十九難、千金方十九卷等也。

○奔豚病「金匱第八曰奔豚病は少腹より起り上て咽喉を衝く發作死せんと欲す」又千金十九卷等。

○頰を齧む「靈樞口問篇。(類十八七)」

○忘の因「靈樞大惑論曰上氣不足し下氣餘有り、腸胃實して心肺虚す故に善く忘る、吾人飽食を止めよ。

○疱瘡「は多く胎毒より來る小兒生れし時胎毒藥を服せしむ可し其治方は頗る繁密也拙著和漢醫方に載す。

○哺露「巢源四十七卷曰小兒乳哺調はず腸胃を傷り飲食する能はず瘦せて苦熱す

○方「薛氏醫案一卷處方論に曰按するに方は倣也彼に倣て此に準ずる也應用に至ては更に權宜(臨機應變の意)を貴ぶ確然移す可からざる者に非らず、是を以

て素問に方無く、難經にも方無し、漢の時、纔に方有り、蓋し病因に倣て方を立る也」又特解六39等を見よ。

○方士「素問五藏別論の次註に曰方術に明悟の士を云ふ。

○旁流「糞結して下らず其傍より臭水を下す也。(瘟疫論下24)

○炮「とは附子、烏頭等の藥品の皮臍を去り水に浸し濕紙に包み雞卵を焼く如く熱灰中に入れ發折せしめ、熱に乗して切片と爲し、再び炒り内外俱に黄ならしめ火毒を去り、藥に入ると本草十七上47に見ゆ。其濕紙に包み發折するを炮と云ふ也。

○泡「は諸方書に徵するに水又は酒等に浸す也。

○亡陽「とは汗大に泄る等を云ふ。(類四18)

○報「灸何報と方書にあるは何返も繰り返して灸する也。

【マ】

○満閉」難經本義曰肝氣臙鬱すれば四支満閉す傳に曰風淫すれば末病むと是れ也。

○麻木」麻は虚也木は濕痰死血也。(赤水十六³⁴) 回春は麻を「ナへ」と訓し木を「スクム」と訓す。

○慢驚」は陰癇の名なり(千金方序文) 即ち陰性の驚風。

○麻疹」は「ハジカ」也赤水に曰吳には之を疹子と呼び新安には麻と爲すと以て麻疹の語源を知る。

○魔及惡病除」其藥方千金十七卷第八同二十四卷第四。

○瞑」は眠る也靈樞熱病篇曰熱病身重く骨痛み耳聾して瞑を好むは之を骨に取る云々。

【ミ】

○未病治」七十七難曰經に言ふ上工は未病を治し中工は已病を治すとは何の謂ぞ

答曰未病治とは肝の病を見ては、肝が脾に傳病するに先つて脾氣を實して肝邪を受けざらしむ」中工は肝の病を見て相傳ることを曉ず、但だ一心に肝を治す故に已病を治むと曰ふ」工は醫を云ふ。

○脈診」は類經五六卷即ち拙著類經色脈篇之を素靈に見れば素問脈要精微論、同平人氣象論、靈樞根結篇、素問三部九候論、同方盛衰論、同玉機真藏論、同經脈別論、靈樞邪氣藏府病形篇、同論疾診尺篇、素問六節藏象論、同大奇論等也又拙著四聖病理及診斷學あり、難經、傷寒論、金匱あり。

【ム】

○無根水」は潦水也」時珍曰甕水の未だ放たざる者を云ふ又時珍は食物本草の註に曰吊桶の下滴と又韓退之曰潢潦水と。(大和本草)

○無陽症」頭疼し發熱項背強り惡寒し無汗に藥を用ても汗無きは陽虚の症なり無陽症と云ふ。(赤水廿三⁵⁴)

○無辜疔むこがん 小兒腦後の項邊に核有りて瘰癧の狀の如し之を按せば軟動して痛まず
(慈航七の二四) 巢源四十八卷曰小兒面黃、髮直ち時に壯熱し、飲食肌膚を生ぜず
久ふして死す之を無辜と謂ふ」本草四十九卷26曰驚癇及疔疾を病む之を無辜疔
と謂ふ。

○無子の候」巢源三十九卷には月水不利、月水不通、子宮冷、帶下、結積を以て
各く無子の因と爲せり」本草奇經八脈76には「經曰脈來ること中央堅實徑に關
に至る者は衝脈也、動すれば少腹痛み上りて心を搶く瘕疔、遺溺有り、女子は
絶孕、醫通二卷72曰男子脈浮弱にして瀦は無子。

○無灰酒」逢原に曰味甜者あましを無灰酒と云ふ、本草曰金陵瓶酒の如き水に礶有り且
つ灰を用ゆ味甚だ甘し無灰酒と謂ふ可からず又黄酒の如き灰ありと鴻曰薬用の
酒は多く無灰酒を使用す故に此の論あり。

○無根火」類廿四29即ち素問氣交變大論曰復すれば則ち寒雨暴にわかに至り氷雹霜雪物

を殺すの類註に之を無根火と謂へり。

夢因夢診

○夢因」巢源四卷に曰腎虚し邪の爲に乗せらるれば夢に交接す、腎虚して精を制
する能はだれば夢に因て感動して泄す」血氣衰損すれば邪に傷れ易し云々魂魄
飛揚し臥して安を得ず、喜て夢む、氣が府うに淫すれば則ち外有餘にして内不足
す、氣が藏うに淫すれば内有餘にして外不足す、若し陰氣盛なれば夢に大水みづを涉
て恐懼す、陽氣盛なれば夢に大火みづ燔やくす、陰陽俱に盛なれば夢に相殺す、上盛
なれば夢に飛ぶ、下に盛なれば夢に墜おつ、甚だ飽けば夢に行く、甚だ飢れば夢
に臥す、肝氣盛なれば夢に怒る、肺氣盛なれば夢に恐懼し哭泣飛揚す、心氣盛な
れば夢に喜笑し恐畏す、脾氣盛なれば夢に歌樂し體重くして身舉らず、腎氣盛
なれば夢に腰脊兩解して屬せず凡そ此の十二盛は至て之を瀉すれば立るに已ゆ
厥氣せき、心に客すれば夢に山嶽たけ燦火ひを見る、肺に客すれば夢に飛揚し金鐵の器奇
物を見る、肝に客すれば夢に山林樹木を見る、脾に客すれば夢に丘陵大澤壞屋

風雨を見る、腎に客すれば夢に深に臨み水中に没すを見る、膀胱に客すれば夢に遊行す、胃に客すれば夢に飲食す、大腸に客すれば田野を夢む、小腸に客すれば夢に聚邑街衢に遊ぶ、膽に客すれば夢に鬪訟し自割す、陰に客すれば夢に接内す、項に客すれば夢に多く首を斬る、脛に客すれば夢に行走して前むを得ず、又深地の中に居す、股に客すれば夢に禮節拜起す、胞に客すれば夢に溲便す、凡そ此の十五不足は之を補へば立るに已ゆ、其れ茲の夢を尋て以て法を設て治すれば病逃る所無し」甲乙六15、靈樞第四、素問第二十四原病式26、正傳38、類十八23以下に記す。

【メ】

○命門小心」原病式35曰經に曰七節の傍中に小心有り楊上善太素に註して曰人の脊骨は二十一節有り下より第七節の傍、左を腎と爲し右を命門と爲す命門は小心なりと、又難經に曰心の原は大陵に出づ、而て太陵の穴は手の厥陰包絡相火小

心の經に屬すと、又玄珠に言ふ太陵の穴を刺すは此れ相火小心の原を瀉するを云ふと然らば則ち右腎命門を小心を爲す乃ち手の厥陰相火包絡の藏也云々

【シ】 小心參閱。

○命門と三焦」正傳或問13に三焦と命門に就て古來諸説有り之に由て問答を載す即ち王叔和か三焦を以て命門と合し表裏と爲すが如きことなり就て見る可し。

○面痛」醫通五卷42に曰面は陽明の部分と爲す而て陽維、諸陽の會に起る皆、面に在り故に面痛は皆火に因る而て虚實の殊る有り、暴痛は多く實、久痛は多く虚云々の論及治方を載す。

○眯目」とは物か目に入る也。(字典)

○明堂」とは鼻の異名なること有り。(類六38)

○冥視」は邪か空竅を害し目睛反戻し半開不動、物を視ること能はざる也。(醫通

四23)

○面身諸病」蛇身、面胞等巢源廿七卷。
○面風」巢源曰夏、面を露し露下りて面皮厚く癬と成る是れ也。

【モ】

○墨啓」音問、器破れて未だ離れざる也次註に曰微裂」と類廿四31に見ゆ。
○捫」は撫持也摸る也又曰「ヒネル」也。

○目叢」は目赤く涙多く胎兒が母胎中に驚を被るの致す所也（事親）類十八卷50には「目叢は直視し驚が如き貌なり絶系す絶系すれば一日半に死す」とあり蓋し同名異病也後者は素問診要經終論也。

○惋」は悶也。○惋亂」（類三27）

○目疾統論」經曰五藏六府の精氣皆上て目に注ぐ云々眼の組織乃至目は血を得て能く視、心火盛なれば百脈沸騰、火に因らざれば病まざる等眼病一切詳説（醫通八卷）又千金方六卷、甲乙經十二卷。

○目疾」事親六卷17 27に治例各一件あり又原病式40に目視論あり其他諸書皆載す。

○問診」は靈樞二卷、及難經等。

○目診」は靈樞寒熱論、同論疾診尺篇等。

○毛診」は靈樞陰陽二十五人篇等なり眉髪を見て血氣の多少等を知る。

○毛髮諸病」巢源廿七卷。

○嘿々」は默々也又靜又昏を云ふ。（集成三24）

○盲腸炎」即ち腸癰也千金方廿三卷第二曰卒に腸癰を得て其病候を曉らず愚醫、人を殺す、腸癰の病たる小腹重く、強く之を抑れば痛み、小便數にして淋に似たり時々汗出て復た惡寒す、其身甲錯し、腹皮急にして腫狀の如し、其脈數は小し膿有り、其脈遲緊は膿無し、甚者は腹脹大、轉側に水聲を聞く、或は臍の周圍に瘡を生じ、或は臍又は大便に膿血を出す」と此病服藥を用て治す現代の

手術人を殺す戒む可し藥方並に灸右千金方に載す又和漢醫方にあり。

○勿ナは大概支那の壹錢に當るナ其他は【ヤ】下藥量。

○目翳メウ【エ】を見よ。○霽霧セウは厚き霧也。(類廿六4)

○目窠メソは目下臥蠶の處也。(類五50) ○目浸メシは涙出て收らざる也。(類廿一31)

○猛疽メイヂは害を爲す急を云ふ。(類十八28)

【ヤ】

○癰ウと癤ウは瘡淺くして大也熱か血に勝てば癰腫す(癰は壅也血壅塞して生ず)原病式曰諸痛痒瘡瘍は皆心火に屬すと又瘡の濶大壹寸以上を癰と云ひ以下を癤と云ふ。

○養性法ヤウセイホフ素問上古天真論、千金方二十七卷。

○天壽の兆テンジュノシロ素問上古天真論、甲乙經六卷、醫通十一卷60。

○陽厥ヤウゲツ原病式曰陽厥は陽症也熱極れば反て厥すヤウゲツ又諸厥病は靈樞厥病篇、素問

厥論。

○藥方ヤクホウ本草一卷二卷ヤクホウ又先藥法と退藥法即ち先づ補て後ちに瀉すると先づ瀉して後ち補ふ法(赤水十29)又同32以下頭の病を足に取る等を記す。

○藥を畏れて用ひざること勿れ用ゆ可きは之を用よ。(赤水十30)

○陽強陰強ヤウキヤウインキヤウ舌を吐て收らざるを陽強と云ひ舌縮て言ふ能はざるを陰強と云ふ。

(慈航五の二66)

○陽病十八陰病十八ヤウビヤクハチインビヤクハチ金匱第一曰陽病十八は頭痛項腰脊臂脚掣痛、陰病十八は欬上氣喘噦咽腸鳴脹滿心痛拘急、五藏、各十八有り合て九十病と爲す云々ヤウビヤクハチ又千金方十九卷曰凡そ陽邪は五藏を害し陰邪は六府を損す云々の論有り。

○厄年ヤクニヤウ靈樞陰陽二十五人篇に在り。

○藥量ヤクリヤウ支那は革命毎に其度量衡を改める惡習ありて誠に困難を極め居れりヤクリヤウ其事は千金方一卷24本草一卷を見ても略ほ之を知る拙著和漢醫方の序例を見て之

【ヤ】

を審にす可し然らざれば漢方醫書を實地に行ふを得ざる也」因に一言す現政府「メートル法」を實施するは實に此の惡習を日本に施す者にて天下を害するの甚大なる者也速に之を廢止せざる可からず。

○藥酒の方」千金一卷26類十二卷3133即ち素問玉版論要篇同湯液醪醴論、本草廿五卷。

○藥餌の別」病を攻るを藥と爲し服食を餌と爲す。

○藥煩」中氣衰へて藥に勝へずして生ず其時薑湯を投ずれば愈ゆ。(瘧疫論四)中氣は脾胃也。

○壅疾」是れ脚氣の古病也是れ美食原味の濕熱下流して生ずる故也、踈通發散の劑を用ゆ然れども亦色慾過度より來る。(良方四卷22)

○天」は短命を云ふ又天色は枯暗不澤を云ふ。(類五13)

○搖頭」小兒頭を揺す病也肝火又は乳母の怒より來る。(醫通)

○野人糞は猴の糞也。

【キ】 は前の【イ】に記せり。

【ユ】

○愈と募」六十七難曰五藏の募は皆陰に在り而て愈は陽に在るは何ぞや、答曰陰病は陽に行き、陽病は陰に行く、故に募は陰に在り愈は陽に在り本義に曰募と愈とは五藏空穴の總名也、腹に在るを陰と爲す、則ち募なり、背に在るを陽と爲す則ち愈なり、募は尙ほ募結の募の如し經氣が此に聚るを言ふ、愈は扁鵲傳に輸に作る猶ほ委輸の輸の如し、經氣、此に由て彼に輸すを云ふ又輸輸愈の三字は古典皆通じ用ゆ。(類九19)

○涌水」涌は湧に同し、疾行すれば濯濯聲有り。(赤水六27又事親六36)

○愈後の復病」不注意の爲め前病に落ち返る也。(赤水廿四30)所謂勞復、食後、陰陽易病是れ也。

○遊風」小兒風毒熱氣に乗ぜられ皮膚赤く腫起し遊行して定らず（巢源）丹毒の類也。

【エ】前の【エ】に載す。

【エ】

○溶溶」は無力の貌（雜經本義）字典安流也

○窈窈、冥冥」は道の深玄を云ふ。（類十二五）

○要害素問刺禁論に曰藏に要害有りと類註曰要する所あり害する所ある也」と昔しは敵に害ありて味方に要なる地を要害と云へり。

○緜併」緜は搖に同し併は攀束して開かざる也。（類廿七三二）

○緜復」とは搖動反覆也。（類廿四二八）

○楊梅瘡」は梅毒瘡也。○豫後」とは西洋家の疾病の終局判断也。○天は【ヤ】下に記す。○瘍疔」は皮膚の疾也。○庸贅」とは「サガリコブ」也（格致餘論抄）

○腰折」とは脊背反張也（類廿一三五）○拘又は兩拘」赤水婦人門五卷15に見ゆ蓋し擁字の略乎或は腰の弱腰を云ふ乎右の字、字書に無し。

○妖狐病」或問ふ山居、狸魅の患有りと云ふ誠に之れ有るや答曰古より有り獨り老狐のみならず人家の猫犬に至るまで妖を爲す者有り、其惑を被る者は大抵皆性淫にして氣血虚する者也云々。（正傳三〇）

○豫防法」諸病多く此の法あり活人書十七卷10以下其一例なり流行感冒、中風の如き最も必要なり拙著和漢醫方、黃帝天候前知萬歲曆の如き是れ也又養性法は總て豫防法と謂ふ可し故に上醫は皆未病の疾を治せり。

【ラ】

○勞瘵其他諸勞虚」勞瘵とは勞の極也肺結核の重病等を指す所謂五勞六極七傷也【コ】下の五勞六極七傷を見よ又大成論曰勞瘵の症は氣體虚し、心腎を勞傷するに由らざる者無し、又先づ瘵疾を病みて咳嗽を爲し、又房事を過し飲食に傷れ

て、此の病を成す、其症たる肉瘦せ皮乾れ、寒熱盜汗し、白濁を洩し或は腹中に塊有り、或は腦後の兩邊に小結核有り或は咳嗽痰涎或は膿血を咳唾す其傳變ずるや二十四種或は三十六種或は九十九種と爲る、又五尸なる者有り云々、又二十四種の勞蒸なる者有り、症に因て驗す可し、蒸が心に在れば云々小腸に在れば云々傳尸の若きに至ては骨蒸、施殭ちがた、復連、尸疰、勞疰、等是れ也夫れ疰は注也上より下に注ぐ之を傳尸と謂ふ、相傳て滅門めつもんに至る」と又巢源三卷之を説くこと七十五候也又素問生氣通天論を見る可し治方に就ては拙著和漢醫方、肺病豫防及治療篇あり其他赤水、慈航等多し。

○勞氣「事親曰人の病は氣に由らざる者なし、其氣九あり怒、喜、悲、寒、暑、驚、憂、思、勞也其勞氣たるや咽噎病（今の咽喉痛）を爲し喘促、嗽血を爲し腰痛、骨痿、肺鳴、高骨壞たかぶね、陰痿、唾血、冥視めいし、耳閉を爲し男は精少く女は不月を爲す甚しきは衰へて壞都の如しと房勞最も大害あり。

○勞風「素問評熱病論曰勞風の病たる人をして上み強く（首を伏する能はず）視ること冥くらからしむ唾出る涕はなの如く風を惡て振寒ず其治云々。（赤水十八卷詳述）

○勞力感冒「勞力して氣血を傷り寒邪に感ず頭疼身熱、惡寒微渴、汗出身痛等あり。

○勞倦「醫通二卷49曰飲食節せず陰虛内熱す」類十四41曰勞倦する所有れば形氣衰少し穀氣盛ならず上焦め行らず下腕通ぜず胃氣熱す熱氣胸中を熏くす故に内熱す其註曰勞倦形を傷るとは脾胃を指す也情欲節せざれば五藏守を失ふて精を傷る精傷るれば陰虛内熱す。此れ尤も甚し。

○勞嗽「一名邪嗽一名注嗽（良方）【コ】五嗽參照。

○勞復「は病の愈後色慾其他の過勞に由り前の病に落ち返る也此の病前の病に十倍す恐れざる可からず。

○藍注「巢源四十九卷3曰小兒風冷の爲め其血脈結聚して核を成し皮肉色藍の如

く久を経て歇やまず。

○勞聾 色慾過勞より來る。(慈航耳病下)

○漏風 一名酒風に因て風を得る身熱懈墮し出汗惡風少氣。(類十五26)

○癩癘 相同し又癩風、大風の名あり「カッタイ」惡疾也此疾不仁極猥より來ると云へり。

○勞瘰 は女勞瘰也。(類十六42) 是れ黃疽わうだんの一種也。

○絡脈 靈樞經脈篇、類經七卷27等也。

○潔潔 は皮毛寒慄也。(類二十二16) 但し本草釋音には時に應ずる出汗と爲す。

○羸瘦 巢源曰是れ六極の一也「ツカレ」「ヤセル」也。

○雷頭風は頭上の赤腫核也。(事親四15又同十一12)

○醪酒は藥酒也。(類十二27)

【リ】

○瘤氣 赤瘤、丹熛、熱が氣に勝つ也。(原病式)

○裏急 一名大瘕泄【コ】後重【ケ】下迫に同し。

○離經 十四難曰脈一呼再至を平と云ふ三至を離經と云ふ四至を奪精と云ふ五至を死と云ふ離經とは其常脈を離脱するを云ふ、診宗三昧52曰臨月の脈は滑數離經に宜し。

○留飲 は水飲滯る也金匱第十二、事親三卷10。

○淋病 五種あり氣淋は小便に餘瀝のこり有る也、砂淋は莖中痛み砂石を出す、血淋は尿血結熱し莖痛す膏淋は尿出膏あぶらの如し、勞淋は勞倦すれば發す、五淋は皆膀胱に熱ある也、諸淋は腎虛し熱有る也。

○隆 は淋の古名也小便不通(類廿二25) 亦癰に作る。

○臨臨然 唇臨々然は厚く質濁り下垂の貌。(類廿15)

○痢風 は痢後脚弱く行履不能なり。(保元五58)

○臨産諸症」醫通十51、正傳30和漢醫方。

○龍火」逢原に樟腦の性を以て龍火と爲す水中に燃るを以て也」雷火也。

○黎黑」は「ススクロシ」譯通○了了」は「サツバリ」同上。○淋瀝」は淋病（赤水小兒門）蓋餘瀝を云ふ。

○鱗體」巢源三十九蛇皮候に曰其狀蛇鱗の如し。

○痢病」慈航曰内傷外感の二種あり内傷は飽食大酒房事過勞より來り、外傷は風感暑濕より生ず、赤白痢共に濕熱なり、最初元氣未だ衰へざる時、下劑を以て下す可し、元來本病の古名を滯下と云ふ、滯るが故に痢となる也下せば愈ゆ。然れども久病後に下せば體疲る故に最初に下す可し。

【ル】

○僂俯」は衛氣の開閉を得ざれば寒氣之に従ひて大僂を生ず。（類十三29）此れ脊「カガム」也。

○涙」肝は涙を爲す素問宣明五氣篇に詳なり。

○瘰癧」類註曰其形累累然として上下を歴貫す又鼠瘻と名く一に結核の連續する者を云ふ蚬蛤の如き者を馬刀と爲す又脇肋下の者を馬刀と爲す」又靈樞第七十、類十八36、事親四18、千金五卷第八同廿三卷第一。本草圖を見るに長形の介にて日本の泥介の如し。

○瘻」巢源三十四卷三十五種の瘻病を記す瘻癧鼠瘻の外種々の瘻あり尙ほ素問一卷15、靈樞寒熱篇參閱」皆瘻は鼠瘻の如く穴を穿つ者也。

【レ】

○攣急」「ヒキツル」也筋膜乾けば筋急にして攣す又濕除かざれば大筋短く小筋長く短は拘を爲し長は痿を爲す。

○廉」は隅也邊也。（十四經）○廉廉然」は唇の薄きを云ふ。（類廿15）

○窳、膠」相同し深空の貌即空隙。（十四經）

【レ】

○「瀉水」「タマリ」水(譯通下66)前の無根水參照。

○「兩感」傷寒論に兩感の語あり是れ藏と府と表裏俱に病む也即ち素問熱病論に曰
寒に兩感する者は巨陽と少陰と俱に病むと類註曰兩感は表裏同病む也足の太
陽と少陰とは表裏たりと他の諸經も皆表裏俱に病むを兩感と云ふ活人書五卷
5、續論上15皆同し。

○「冷結」手足厥冷脈沉細小腹脹滿之を按して痛む等也。(赤水廿四17)

○「冷勞」婦人冷勞は血氣不足也。(良方五卷17)

○「歷節風」前の【ツ】痛風を見よ。

○「癰瘍」是れ癰疽なまづの類症にして頸邊等に斑剝點相連り色微白にして圓なり亦黒色
の者あり。(集源卅一卷)

【ロ】

○「漏疾」とは大小便失禁し「シマリ」無き也。(類十三48)

○「臚脹」臚は皮也又一に腹前を云ふ。(類廿六30)

○「漏風」頭面出汗也是れ醉後風に當て致す。(保元四58)

○「漏下」暴卒にはかに血下るを崩中と謂ひ、非時に血下り淋瀝として斷ざるを漏下と曰
ふ婦人病也。(慈航六の二)

○「六不治」千金方一卷の曰病に六不治有り一には驕恣にして理を論ぜず二には身
を輕じ財を重んず三には衣食適する能はず四には陰陽並に藏氣足らず五には形
羸つかれ藥を服する能はず六には巫を信じて醫を信ぜず。

○「漏」は前の瘻と同く穿穴する也痔漏の如き是れ也。

○「蘆」は頭の端はじにして莖の根なり即ち大根葉の根にして大根の頭の處也人參など蘆
を去て用ゆ。

○「六淫」とは風雨、寒暑、濕燥也

○「老壯少」五十以上を老と爲し二十以上を壯と爲し十八以上を少と爲し六歳以下

を小と爲す。(靈樞第五十九)

○綠水暴下」是れ殮泄に驚怖すれば、膽木、邪を受け之を下す。(事親十7)

○漉漉」は汗大出。(類十六7)

○六府病」靈樞第四、類經二十卷27以下。

○臘」は冬至後第三の戌を云ふ。(三才圖會)

【ク】

○惑」靈樞大惑論。

○腋臭」此の病は體氣の不和より生ず治方灸藥俱に諸書に有り千金方廿四卷第五

巢源三十一卷其他。

○盥」は小盂也盂は飯器也。

漢醫術語解及索引 終

昭和十年六月二十日 印刷
昭和十年六月二十五日 發行

漢醫術語解及索引

正價 金壹圓五拾錢

不許複製

著者 岸原 鴻太郎

發行者 富倉 邦彦
東京市本郷區龍岡町三六

印刷者 竹田 佐藏
東京市神田區三崎町二ノ四

印刷所 一匡印刷所
東京市神田區三崎町二ノ四

發行所

東京市本郷區龍岡町三六
電話振替東京一八〇一七番
小石川四一七八番

富倉書店



沖翁 小泉榮次郎先生選

日本醫藥隨筆集成

三三判半截・紙數七百餘頁
挿圖 壹百餘個
正價 參圓五拾錢
送料 十圓四錢

記事面白く讀んで世渡りの要諦を會得する良書

茲に學者として令名あり、古書隨筆の蒐集に半生涯を傾注せられし選者は多年蘊蓄を披瀝して此の難事業を完成せられた。春風秋雨幾星霜凡そ醫藥に關する隨筆感想錄の眼に觸るるものあれば直ちに採録、筐底に深くおさめ、今や稿紙は積むで山を成した。實に醫藥家隨筆書にとどまらず、當時の政治經濟學は勿論、易者、戯作、文藝、町人、俳文に至るまでのものを汎く涉獵して、醫藥衛生の記事は以て剩すところなき迄抄録し、而して其の代表的なものを選んで、以て此の書はなつたものである。

好 評 嘖 々

平馬左橋先生著
正木 豊先生校訂

救急法と個人衛生

ポケット型 三〇〇頁
正價 八圓十錢
送料 六圓

天野利隆先生著 袖珍内科診察法

ポケット型 一五〇頁
正價 一圓二十錢
送料 六圓

岸原鴻太郎先生名著

和漢 四聖 診斷 及 病理 學

四六判本 綴美裝
正價 百三拾圓
送料 六圓

本書は大己貴命、少彦名命の遺法と明の醫聖林蕙の慈航と清の國手張路玉の診察とを合卷にせし者にて是亦無類の好典也醫家必要

增補 訂正 萬病鍼灸全書

菊判美本・三百三十一頁
別冊挿圖添加
正價 金三圓五十錢
送料 十圓四錢

本書は漢方の寶典類經等に由り諸法を集め編せし者の再版にて世間の好評の書也術語解あり病理説明あり概總穴の索引ありて其求る治穴を一目して知るを得る故に全書と名く又別紙廣告に萬病名灸集あり共に必要の書也

家寶

自力興産方

正價 金七十錢
特價 金五十錢

是れ毎年の天候動植物の豊凶及び其年々の適物を前知する萬歳曆にして農商共に必要の書なり黃帝の神書也次に儉勤法を載せ次に和漢灸藥方を載す真に家寶の珍書

一抱子 鍼灸大成

正價 金貳圓也
送料 十圓

是れ古の漢方有名の岡本一抱子の著書を重刊し補正せし者にて鍼灸學者に最も適當なる書也

著名生先郎太鴻原岸

通萬病名灸集

附記「藥方及病理」

菊判本綴美裝
正價金十圓別冊附
送料十圓二錢也

東洋醫中學び易くして效多き者は灸法なり、又何人も學び得可し、古大醫盧天民曰「灸法の道至れり盡せり大小の疾病皆之を行ふ可し」と然るに後世、灸法は僅かに疝氣脚氣腰痛等に限る者の如く、誤解せられしは、術者の無學と醫書が漢文の上に専門的で、術語の註解も無く、且つ秘傳とか一子相傳とかの弊風の爲め、萬病に對する灸效が隱蔽せられし也、此の故に本書は先づ萬病通治の灸法を載せ、次に各種の病治方を載せたり、是を以て開卷直に、某の病は某の灸處と云ふことが、一見明瞭となりて、更に隠れたる灸效無きに至れり、加ふるに難病には病理及び藥方を附記せし者なし。

類經色脈篇

四六判本綴美裝
正價金貳圓參拾錢
送及版料一圓八十錢

本書は診察法也其色を見其脈を切し其聲を聞き其苦む所を問て其病を知る又之を合診して其病症を確認する也此の篇は古大醫張介賓が靈樞と素問を類集し其註には難經甲乙經其他有名の説を擧げし醫家必要の診斷寶典也

俗和漢醫方

四六判本綴美裝
正價金八圓十錢
送料十圓

本書は著者貳拾餘年研究の結果にて古醫書の良法にして日本に適する者を集めて大成し灸穴をも附記し又家畜の病瘵迄も載せたり

60
1352

終